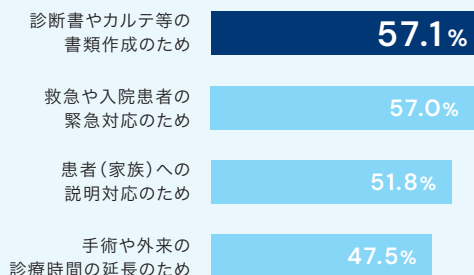


日本の診療現場に最適化された国産の医療特化型言語AIモデルの社会実装

「防ぎ得た死」をなくし、 持続可能な医療の実現に挑む

医師の所定外労働が発生する理由



【出典】「平成29年度過労死等防止白書」厚生労働省よりSMBC京大スタジオ作成
<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/karoushi/18/index.html>

課題・背景

近年でも日本の医療現場では、患者の救命が間に合わない事態が少なからず発生しています。こうした事態は、医療従事者の業務負担の大きさが要因の一つです。医療従事者の時間外労働の最大要因は、症状詳記、紹介状、サマリーといった書類作成です。近年、高齢患者が急増しており、複数疾患を抱える方も多く、医療文書の作成は複雑になり難易度が高まっています。業務負担が原因で瞬発的な判断が遅れ、患者の救命に影響が出ることは避けなければなりません。救命に始まる急性期から長期的な治療・リハビリを行う生活期まで、一連の医療の持続可能性を確保することが喫緊の課題となっています。

取り組むアプローチ

医療従事者が患者と集中して向き合う時間を確保し、医療の質を担保するためにはDXによる業務改革が不可欠です。そこで本プロジェクトでは、言語AIモデルの開発を通じ、急性期の医療従事者の業務負担軽減を目指します。診療現場の情報を集約・整理し、医師との対話により知識を獲得しながら医療文書を半自動作成するAIモデルを開発します。特に、医療文書作成の難易度の高い高齢患者を対象として急性期における症状詳記を作成するAIモデルを開発し、そこから他の医療文書や診療科への展開を目指します。また、高齢患者は、退院後の継続的な治療やリハビリ、介護の適切な実施が生活の質の維持・向上のために重要です。AIモデルが作る医療文書を起点にリハビリ病院・介護施設への転院調整や、診療情報連携などのDX化を推進することで、急性期から生活期へのシームレスな移行と再入院の予防ができる仕組みを構築し、持続可能な医療にも貢献できる可能性があります。

プロジェクト代表



救急医として働いている中で、「防ぎ得た死」のない世界を実現したいと強く感じています。医師が日々向き合っている厄介ごとをなくすことができれば、救命率が上がるのではないかと考え、研究開発を始めました。本プロジェクトでは、まず専門の急性期医療から国産AIの実装を進め、その成果を介護や地域連携といった広い領域へ波及させます。医師が本来の能力を発揮し、臨床だけでなく研究にも挑戦し続けられる環境の整備は、医療の質の維持に不可欠です。現場の課題を着実に解決し、持続可能な医療のあり方を構築していきます。

岡田 直己 京都大学大学院情報学研究科 博士課程



人口減少社会で医療・介護の持続可能性をどう守り抜くか。現場の担い手不足が問題視される中、様々な専門職が「総がかり」で領域間の隙間を埋める必要があります。そのために、病院から地域、急性期から介護へと患者さんが移る際の「情報の分断」を防ぎ、シームレスな連携の実現が、本人のQOLを保ち再発や再入院を防ぐ鍵となります。AIを活用して医療従事者の負担を軽減し、医療文書を起点に専門職同士を繋ぐ「共通言語」を創り出す。この挑戦を通じて、誰もが安心して暮らせる社会の基盤を、一歩ずつ着実に構築していきます。

齊木 大 日本総合研究所 創発戦略センター 副所長

プロジェクト
ページ

